

# ペシャワール会報

No. 22



結婚式  
パキスタン・フンザ地方  
(絵・山田純子)

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

# あるパシュトゥン患者の死

中 村 哲



ペシャワールのオールドバザール

## 頑固さと誇り

私が駆け付けたときには、もう彼は虫の息といってよかった。十三歳の息子が、息もたえだえの父を半座位に抱え起こして茫然としていた。ペシャワールの、スラムと言うよりは、一般の人々の家並みの一角に彼の住居がある。すえたどぶの匂いと埃のたたずまいをくぐり、土壁に囲まれた彼の家に入ると、炊事場と便所とを兼ねた小さな空間を残して六畳ほどの小屋が一つある。薄暗い部屋には丸太で組んだベッドが三つあり、ここに彼は七人の家族と共に生活してきた。

「ドクター・サーブ」と彼は私を認めて、弱々しく、しかし絞り出すように言った。

「私はここが幸せなのです。家族を離れて治る見通しのない入院生活を続けたくなかったのです。どうせアッラーのお召しなら、病院よりもここが良いのです。どうか放っておいて下さい」

そう言つてさめざめと泣いた。いや、泣こうとしたが瞼の閉じぬ白眼は乾燥して涙の粒はあふれてこなかった。指の無くなった平たい両手でしつかりと私の手を取った。「意地を張らずに病院に帰れ。助かるんだぞ」と私が言うと、毅然として首を横に振った。パシュトゥンらしい特有の頑固さと誇りをむきだしにしたので、私も黙ってしまった。

彼はもう六十歳になる。本当に六十歳かどうかは疑わしいが、ペシャワール・ミツシオン病院のらい病棟のチョコキダール(門衛)として雇用された年齢に二十を足すとそうなる。しかし、正確な年齢を詮索するのは我々の余計な厳密さである。ともかく彼は、自分でもう天に召されても不思議はないと判断できる年齢に近くなつたということだ。

## ジハド

彼はアブドゥル・サタールという。故郷はペシャワールの北西、アフガニスタンのクナール州の一寒村である。ものごころついた頃から、彼は他の村の子供達と同様、家の手伝いと遊びに余念がなかった。何の変哲もない山奥の平和な村の生活だった。夏は羊を駆つて谷から谷をカルカ(牧草地)を求めて歩き回った。春から夏は小麦の収穫、高値な米は領主様にさしだす。秋は冬



テトラールの農村風景

に備えてたきぎ集めが忙しくなる。水汲み、小さな弟や妹の世話も大切な子供の仕事だ。学校? そんなものは物好きの地主様のお坊ちやまの行くところだ。俺達には何の関係もない。字など覚えるのは偉いモスクのムッラー(お坊さま)の仕事だ。マドラサ(モスクでの宗教教育)で神様の事を知れば十分だ。

時折、大人たちが領主様の命令でラシユカル(戦争)に出掛ける。「アングレーズ(英国人)」と戦うのだという。アングレーズって何だろう。何だかよく解らないが得体の知れぬ悪い奴らだ。俺達パシュトゥンとイスラムの敵だ。カーフィル(異教徒)だ。第一、地主様やムッラー様がそうおっしゃっている。

——そう信じて彼は育った。

ある時、大勢の村の男衆たちが武装し、長老に連れられて村を出た。村人は熱狂的にそれを見送った。待ちに待ったジハド(聖戦)の時が来たのだ。カシミールへ! 我々の桃源郷を異教徒ヒンドゥたちが奪おうとしているのだ。カシミールのイスラム同胞を救うのだ、と彼は聞かされた。旧式のエ

ンフィールド銃を手に、葉莖を肩に掛けたものものしいで立ちの男たちは、村々から集まってたちまち数百人の部隊となり、チトラールからシャンドゥール峠を越えてカシミールに入った。(一九四九年の第一次印パ戦争の時とほぼ一致する。カシミール争奪を巡る印度—パキスタンの紛争に多数のパシュトゥン住民が参加したらしい。)

サタールはまだ十歳前後だったがこの時の男たちの勇ましい姿が忘れられない。帰ってきた若い衆の手柄話に、眼を輝かせてうっとりとして聴き入ったものである。自分もいつかは誇り高いパシュトゥンとして生き、命を神に捧げるのだ、と何度も自分に言い聞かせた。

## ジュザーム

それから数年が過ぎた。単調な毎日だった。茶褐色の荒々しい岩肌と不毛の岩石沙漠に浮かぶオアシスの村、抜けるような青い空、となり村との争い、日なたぼっこをしながら楽しむ噂話、農作業の手伝い、それが全てだった。

ある夏の日、サタールは小麦の刈り入れ

をした後、シャツの袖がぐっしより血に染まっていることを弟から告げられた。刈り入れの最中に、鎌で怪我をしたそそっかしい奴が自分の服に触れたのだらうと思った。よく調べると小指から手の甲にかけて深い鎌きずがあつた。しかし、不思議なことに何の痛みもなかつた。ハーキム(村医者)のところまで手当を受けたが、小指は化膿してそのうち無くなってしまった。

その後、しばしば指先や足にやけどや怪我をしたが、妙なことにひどく化膿してから目で見てもやつと気づくのである。そのうち体中に赤いはれものが出てのりに気づくようになった。時々熱が出て体の節々がひどく痛む。医者に見せたいが、ペシャワールは遠い。第一よほどのことがない限りペシャワールなど村人はゆかぬ。こんな寒村で一生に一度見ればよい所だ。

やがてさらに数年が過ぎた。サタールの病状は年々悪化して行つた。両手の指は殆ど無くなり、足指もいつの間にか抜け落ちてしまった。まだ若いのに頭髮が抜けてはげあがり、瞼が閉じにくくなって白まなこがむきだしになった。近所の者も気味悪がるようになり、家族も心配した。崇りだと

言う者もあつた。

とうとう決心して、ペシャワールの医者のところに行くことにした。バス賃が無かつたので、知り合いの運送業者に頼んで乗せてもらい、やつとたどり着いた。ペシャワールには同郷のクナール出身者が居たので、とりあえず身を寄せ、出来たばかりの、無料診療をしていると聞いた病院に行つた。

何時間も待たされてやつと医者に会えたが、「大丈夫、そのうち治る」と言われ、一目見るだけで診察らしいものもなく、面倒臭そうに処方箋を渡されただけだつた。もう一枚の紙切れには何か英語で書いてあつたが、よく分からなかつた。帰宅して知人に見せると、「おまえはジュザーム(らい)だ」といわれて突然追い出されてしまった。「ジュザーム」とは何だろうか? 以前にどこかで聞いたことがあるが、サタールはよく知らなかつた。その知人に食い下がつた。

「なぜジュザームがいけないんだ。同じムサルマーン(イスラム教徒)なのに何故そんなことをするのだ。」

彼は、屈辱に耐えられなかつた。

## アングレーズの病院

——その後のことは、彼は余り語りたがらなかつた。ただ、私が人から聞いたのは、彼が物乞いしながらペシャワールをうろついていたということだけである。故郷のクナールにはもう帰らなかつた。

こうして、またペシャワールで何年かが過ぎた。一九六八年のある日、ミッシェン病院で、ジュザームの治療をする所が出来た、と噂に聞いた。「アングレーズ(英国人)」の病院だが評判が良かった。ペシャワールの人々はアングレーズでも、いい人ならば構いはしない。サタールも、長いペシャワールでの生活で多少は抵抗がなくなつていたので、思い切つて訪ねてみた。

おそろおそろ会つた「アングレーズの医者」は、サタールの異様な容貌も、薄汚い物乞いの姿も意に介さないようだつた。流暢なウルドゥ語で、ちゃんと治療すればこれ以上は悪くならないから、と丁寧に説明して、膿だらけの傷を手当てしてくれた。サタールは涙がこぼれた。おそろくこれが、彼が故郷を出てから初めて受けた親切な態



## 急募 JAMS発

### 「共に歩む」ボランティアを!!

JAMSでは日本からのボランティアを募集しております。ただし、JAMSは出来上がった団体ではなく、熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ボランティアを歓迎します。短期長期を問わず受け入れます。送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、ボランティアたちは短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でしかこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

#### ① 募集対象:

1. 医療技術者(医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など)。又は事務関係者で外国語(英語又は現地語)の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、簡単な日常英会話ができる者。
- ② 6カ月以上の滞在者は、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をさせていただきます。
- ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費の一部を負担します。旅行傷害保険は自前です。ボランティアとして報酬は期待できません。
- ④ 学生などの短期見学も拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。
- ⑤ 現地のビザや身分は、現地パキスタンの行政機関と協力して保証し、最大限の安全も図ります。詳しくはペシャワール事務局に直接お問い合わせ下さい。

1989年10月

Japan-Afghan Medical Service

度だったからである。  
案内された病棟には、同じジュザームの患者たちが入院して治療を受けていた。パキスタン人のスタッフがこざつぱりした身なりで、ときばきと病気の説明をし、薬を続けてのむこと、手や足の傷に気をつけ、何かあったらいつでも病棟にくることを説明してくれた。

一九七五年に、「別のアングレーズ」のグループがらい病棟に来た。アングレーズにもいろいろあって、ベルギーという所から来たらしい。ともかくよく分からぬが、非常に献身的で、カーフィル(異教徒)とも思えない。「イスラムの兄弟」は自分に何をしてくれただろう。このカーフィルたちは、本当はムサルマーン(イスラム教徒)に違いない、とも思ったりした。彼らはサタールの物乞いをやめさせ、らい病棟の門衛として雇われた。「神は大変お喜びになります(ご喜捨を)」などと言って、もうバザールで屈辱的なお貰いをする必要はなくなった。初任給は四百ルピーで、まずまずだった。

\*

\*

五十ルピーでスラムの一角に家を借り、数年後には貯めた金で女を娶り、一家を構えることが出来た。職務には忠実で、一度も遅刻をした事はなかった。

私が一九八四年に赴任して以来も、サタールは常にらい病棟の入り口で、まるで警察官のようにじつと椅子に腰掛けて番をしていた。目付きの悪いやつだ、と初め私は思っていたが、パシュトゥ語が分かるようになって世間話ができるようになると、屈託なく冗談を飛ばして明るい男だった。指のなくなった手は、よく私の診療の役に立った。感覚障害で不注意にやけどを繰り返す、きき分けのない患者がいる場合、このサタールを呼びつけ、彼の指のない両

### 実直なイスラム教徒

手を見せる。

「用心してないと、おまえもこんな手になるぞ。」

サタールは心得たもので、クナールなまりの強いパシウトウ語で、威嚇するように演技する。

「ドクター・サーブのおつしやるのは本当だぞ。これを見ろ。おれも、もう少し早く治療を受けて、いうことを聞いていれば、こんなにならなかつたものを……。アッラー(神よ)、トーバ、トーバ(くわばら、くわばら)。」

大抵の新患者はぎよつとして、よく分かりましたと、何度もうなずいたものだ。

長期滞在患者が増えてきて病棟で不穏な動きがあるときは、彼がいちはやく察知して知らせてくれる。スタッフの怠慢もつつ抜けて、病棟の様子が手に取るように分かる。目立たぬが貴重な存在だった。

しかし、彼も自分の習性と信念から、イスラム教徒としての節を貫いていた。パシウトウンとしての誇りも捨てなかつた。口論のときなどは、人間はなれした獯猛な顔つきに変わる。あるときは、食事の改善をめぐる入院患者のハンガー・ストライキ

があつた。またある時は、パキスタン患者とアフガン患者との対立が起きたりした。

そんなとき、「お前もムサルマーンだから加われ」という誘いに、眼をむいて怒つて言った。

「ここが嫌なら他へ行きやいい。『ムサルマーンだから』なんて言葉は俺は信じねえ。おめえたちの事でドクター・サーブが居なくなりやどうするんだ。俺はそのムサルマーンとやらに騙されて来たのさ。それに、パキスタンもアフガニスタンもあるものか。ジュザームはジュザームだ。患者はちゃんと治療を受けてりやいいんだ。」

全く彼は実直なイスラム教徒であり、パシウトウンであつた。

男女の不祥事にも厳しかった。ある時、夜間に女性のトイレに潜んでいた男子患者が発見されてつかまつた時などは、皆で犯人を捕らえ、顔に墨を塗りつけて追放したことがあつた。

「パシウトウンの習慣なのか」と尋くと、「とんでもない。村ではこれくらいでは収まりませんや。鉄砲でぶち殺して終わりです。」

## 一徹者

一九八八年秋、アフガン人・チームの再組織化のため、私は一時的に病棟を離れていた。その直後、サタールは高熱で倒れた。私が診に行つた時、明らかに腸チフスであつたが、その後急激に衰弱し、敗血症、さらに急性粟粒結核を患つた。私の代わりに、ミツシヨン病院の内科の医師が診ていたが、長引く治療に耐えきれず、怒つて退院してしまつた。というより、自分の判断で「臨終」を決め込んでしまつたのだ。

一徹者のサタールは、不誠実なパキスタン人の医者と病院をのろい、死を決意した。私が三週間たつて彼の家を訪れたときは、本当に虫の息だつた。聴診器を忘れてきたので、自分の耳を彼の背中につけて聴くと、ひどい喘鳴が聞こえ、高熱で耳が熱く感じた。しかし、衰弱しきつた状態にもかかわらず、彼の体温が何かたぎるような彼の意志を生々しく私の耳に伝えるようであつた。一緒についてきたアフガン人の医師が言った。

「死相がでています。このような患者を



河原で祈るアフガン難民

私は何人も診ました。もう諦めるべきです。彼らの意志を変える事は不可能です。」

しかし、私はこの患者への愛着を捨て切れないと同時に、残される家族——妻と四人の子供達の事を思えば、いたたまれなかつた。死亡する前にと、急いでミッシヨン病院からの年金の手続きを済ませ、ともかく指示された結核の薬と、日に二リットルのスープは無理にでも飲むように命令した。「お前は潔いつもりだろうが、そうはいかん。後に残される者のことも考えてみる。」

お前の命はアッラー(神)のものだ。お前自身で判断はつかぬ。恰好をつけるな。恥をさらして生きなさいかんこともある。」

「ドクター・サーブ、分かりました。おっしゃる通りにします。ただ、病院には死んでも帰りません。家族と一緒に居させて下さい。」

横では、もう一人の病人が狭く暗い部屋の中に横たわっていた。彼の妻で、まだ四十歳前であつたが、青白く痩せこけて激しく咳きこんでいた。十歳前後の女の子がその背中をさすっていた。彼女も肺結核で、最近治療を始めたばかりであつた。他の五、六歳の子供達は姉の手伝いをして、水運びや両親の世話で忙しそうであつた。

殆ど絶望的な気持ちで私は外に出た。暗い家の中と対照に、明るい青空と強烈な日差しが目につ痛かった。埃の舞う路地では、近所の子供達が何事もないうように群れて、笑顔に溢れて楽しそうに遊んでいた。粗末な泥の家並みを背景に駐車している、日本から送られてきた真新しいジープが、妙に不釣り合いで白々しかった。

大通りに出ると、折から戒厳令解除後初の総選挙の後で、街は騒然としていた。人

民党の赤・黒・緑の三色旗と赤旗が街路を埋め尽くし、人民党の圧勝と「自由とデモクラシーの到来」をスピーカーが喧しくがなりたてていた。しかし、勝利を告げる人民党の三色旗も、イスラム平等主義のスロームガンも、パキスタン建国の理想も、ヒューマニズムも、パシユトウ民族主義も、いかなる政治的宣伝も、今の我々には余りに無縁なものであつた。そして、日本がいよいよ遠く遙かに感ぜられた。

(一九八八年十一月記)



なむらてつ

一九四六年福岡市生まれ。福岡高校を経て一九七三年九州大学医学部卒。国

内の病院に勤務したあと、パキスタンでの医療活動を志し、リバプールの熱帯医学学校に留学、一九八四年五月、日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)より派遣されてペシャワール・ミッシヨン・ホスピタルに家族を伴って赴任。現在九歳、六歳、三歳の三人の子供がいる。

語り手 ● 石松義弘

聞き手 ● 中村 哲

私も若いので

JAMSと共に頑張っていていきます

ここはJAMSのオフィス。ここのとこ

ろ忙しくて疲れ気味の石松先生に原稿の催促の勢いも鈍りがちな私を見兼ねてか、同情してか、ちよつと一息ついた午後、中村先生自らインタビュアーの役をかってでてくださいました。(沢田裕子)

医療者としての

存在感を感じはじめた

中村 石松先生が来てから八カ月経ったけど、どうね。ペシャワールに来る前に考えていた海外協力と現実のギャップなんかあるんやないかな。

石松 うーん、でも、来る前からあんまり色々考えてなかったし、状況にあわせてできることをしようと思っていたから。まあ、こんなもんじゃあないかなあ。

中 こんなものかな、というのをもつと具

体的に言ったら？

石 例えば、難民キャンプに行つて、薬を配つて、命を救おうというのだけではだめだ、というのは観念として感じていたけれども、実際にキャンプに行くと、いわゆる「30秒医療」と呼ばれるような利他的医療ではなく、残るもの、人を育てるとか、緑を育てるとかしかないということを実感したというか……。ついこの間のように、キャンプから連れて来た子供が次の日に死んだ時など、もつと早い内に何とかできなかつたのかと、痛感させられたり。

中 うん、月並みだけど、予防医療が第一だといわれるのが、「身にしてみてもわかった、というところかな？

石 そうですね。同時に、ここにこうして居るだけでも役に立つ事ができる。基本的な医療知識や態勢がないところだから、施

薬だけをとつてもやることはたくさんある。最近になってやつと医者らしいことをしていると思えるようになった。医療者としての存在感を自分に感じ始めました。

JAMSを

育てていくのが仕事

中 ん？ 最近、ということは、以前はやはり「こんなはずじゃなかった」というところがあつたのかな？ 色々いいことだけを書いてる僕に騙された、というような……。(笑)。

石 いえいえ。最初から騙されようと思つて来ましたから(笑)。それに、JAMSは未成熟だから、それを育てていくのが仕事だと思ってるから、そういう気持ちはありませんよ。

中 絶望してない？

石 してない。

中 じゃあ、一番しゃくにさわることとあったら？

石 アフガン人同士、パキスタン人とアフガン人、日本からみて困っている人同士、どうしてあんなにいがみ合うのか。このスタッフを見ていても、彼らの掲げる理想





JAMSの授業風景、全てペルシャ語で行われる

と現実が違うじゃないかと思ったりする。同じアフガン人同士でも、兄弟か、敵か、という感覚で、身内で固まるし、それが未だに抵抗がある。彼らの自己防衛本能だとも思うけど。

中 ミッションホスピタルとJAMSの関係にしても難しいものがあるよね。パキスタン人对アフガン人という。我々のような外国人が間にいることで辛うじて関係が保たれているようなところがある。

石 足の引つ張り合いね。誰かが失敗をすると必ず、自分のミスではないと主張する。

### 休みの日には

#### 行くところがない

中 まあ、イヤな話になってきたけど、来て良かったと思うところは？ 時間を守らなくてもいいとか（笑）。

石 患者さんと話をするのは楽しいですね。日本では、忙しいのもあるし、言葉もすぐに通じるからそんなに時間をかけなくてもいいというのもあるけど。こっちは時間があるから、言葉の練習をかねてゆつくり診察ができる。一度仲良くなると温かい人間関係ができるし、知り合いが増えれば増えるほど楽しくなるんじゃないかと思う。何でも自分でしなければいけないのは大変だけど、スタッフと一緒に色々やって覚えてくれるのも楽しいし。

中 「人作り」ね。

石 そう。結構、皆、まじめで熱心だし。

中 言葉の問題はどう？

石 診察の言葉は決まっているのでなんとか。でも、日常会話はまだまだ。忙しいと、つい、英語ですましてしまいますね。今夜、ペルシャ語の学校に行ってみますけど。

中 石松君のJAMSでの一日を紹介した

ら？

石 朝八時に朝礼、八時半に打ち合わせ。

九時から十時まで回診して午後一時まで外来。午後は、検査室で教えたり、病棟で処置をしたり。火曜日は手術、木曜は難民キャンプ。四時から六時までドクターの勉強会。夜は、ペルシャ語の学校。

中 退屈だと思ふことはない？

石 ありますね。一日のうち一時間ポツカリ空いてしまつて、することがないなあ、なんて思うことがある。休みの日には行く所がないし……。大体寝てるけど。

中 食べ物はどうなものを？

石 今は国連の佐藤さんと一緒に部屋を借りていてコックさんがいるのでパキスタン料理と西洋料理を混ぜたようなものを食べます。

いしまつ よしひろ  
 一九五九年 熊本県生まれ。  
 一九七八年 済々黌高校卒業。  
 在学中、山岳部で九州や信州の山を登る。  
 一九八七年 大分医科大学卒業。  
 天心堂へつき病院にて外科、内科の研修開始。  
 一九八九年四月 パキスタンのペシャワールへ出発。

中 こちらの食べ物に抵抗はないの？

石 毎日だと困るけど、嫌いじゃないですよ。まあ、もともと僕は味覚文化に対する認識がないから。アフガン料理では、カバブとナンがおいしい。

### 違いを認めつつ

#### 一緒にやる

中 話は変わって、日本側のドナー（寄付者）、ワーカーに対して、海外協力にきれいなだけのイメージを持っている人もあるよ。うだけど、何かコメントがあるかな？

石 まあ、そういうイメージから入っているのもひとつだけど、何か仕事をするためには長くないなくちや出来ないし、長く居るためには体力も要るし、息抜きという妥協も必要。日本人であることは変えられないけれど、違う物を食べているからといって相互理解ができないことはないし、違いは違いとして認めて、一緒にやってみようとする気持ちがあるかないかが大切だと思う。中 異質性を認めて共に生きるということかな。おでん屋の「もつ」みたいなもので、どこまで噛んで飲み込むか、その兼ね合いを自分で調節していったら良い、というのかな。



ペシャワールのカバブ屋

石 そう。うわべだけにこだわってもしようがない。

### 準備は万全に

#### 心理的には気楽に

中 では、らしいの仕事に関わって、日本のらいと比べてどう思う？

石 日本のらしいをあまり詳しく知らないけれど、こちらは、見た目にはひどいけど、付き合ってみると、悲惨な感じはしない。中 それは、偏見が少ないせいですかね。

石 囲りも患者さん自身も偏見がなく、寛容だという印象がありますね。

中 日本からのボランティアが来ますが、彼らに対して一言。

石 基本的には、気楽に来たら良い。肩に力を入れて来る必要はないけれど、具体的なところで役に立るところは沢山あるので、気楽に、かつ、用意周到に、というか。構えずに現実を見るということが一番大事。あんまり気楽でも困るけど、せっかく来るんだからパキスタンの本でも読んで来たらしい。準備を十分して、心理的には気楽に。依頼心がありすぎるのも困るから。

中 ペシャワールには、まだしばらく居る？

石 二、三年ぐらいはいないと、日本で言うて来た手前、かつこうがつかない（笑）。まあ、どうなるかわかりませんが、こういう仕事はずっと続けたいと思っているので、そういう点からも、ここは熱帯医学の非常に良い勉強になっていると思います。

中 こういふ仕事というのは、発展途上の医療ということだよ。後は、どんな所に行きたいと思ってるの？

石 第三世界だったらどこでもいいけど、まあ、好きな所と言えば、アフリカかな。

中 将来の希望として、こうなりたい、こうしたいということは？

石 とにかく、もっと、臨床の力をつけたいですね。

◆ ◆ ◆  
**お金だけの援助は  
 現地に混乱を招くだけ**

中 ここで見たODA（政府開発援助）に一言あれば。

石 関わり方にも色々あると思う。NGOにも色々あるし、日本のODAに関して言えば、額が問題じゃなくて、どう使われて



難民キャンプで子供を診る

いるか、中身を見届けていく必要があると思う。金を出すだけだったら、現地に混乱を招くだけだから、しない方がいい。

日本の援助の歴史は浅いけど、質を考える時期に来ているんじゃないですか。日本の面子を保つために出す援助じゃなく、本当に役に立っているか見届ける。これは、ODAに限らず他のNGOも考えなくてはいけないことだと思いますよ。

中 例えば、日本の良心的な人々にも、ひとつの誤解があると思うんだよね。豊かなところから貧しい所へ、みたいな。ここにはこの、泣き笑いがあるんであって。そういうことも含めて日本のサポートしてくれる人達にメッセージを。

● 石松さん出発間際のエピソード

大分を離れる前日、心配になって石松先生に様子を伺う。「まあ、どうにかなりそう」いたつてのん気である。空港まで送ることにしたので待ち合わせの時間のみ確認しておいた。当日の朝、石松先生より電話がかかる。SOSである。片付かないので手伝って欲しいとの事。私は「やっぱりな！」という感じで部屋を訪ねて手伝う。バタバタ片付け、大きなスーツケースと荷物がはちきれんばかりに入

石 慈善が悪いというわけではないけれど、そこから、もう一歩先に進んで、日本を含めて一緒に生きて行くには、協力していかない、という風なところまでいけたらいいんじゃないかな。

中 じゃあ、先生もお疲れのようだから、これくらいにしましょうか。

石 はい、JAMSには、これからどうにでもなる可能性、若い感じがあるし、私も若いので（ここで一同爆笑と書いたら、と中村先生が言いました）、一緒に頑張りたいと思います。

\* \*

中村先生、インタビュアーお疲れ様でした。石松先生、有り難うございました。

つた山登り用のリュックに木箱を一つかかえて車に乗り込む。

空港の出発ロビーでも、そのへんに旅行に行くかの様子である。出発ゲートをくぐる時も「それじゃあ」と片手を挙げておしまい。非常に淡々としたお別れである。飛行機が見えなくなるまで、石松先生の無事とこれからの仕事の成果を祈る。

（小畑貴子・天心堂へつぎ病院）

## ●風の学校主宰

中田正一

## アフガン農村の復興を願って

風の学校の校長先生・中田正一さんは、農業技術と手掘り井戸の技術を持ってアフリカやアジアの各地に向かわれる。この号が出る頃はフィリピン。縁あってJAMSと共にアフガン復興の希いを一つにされた。明治生まれの八十三歳。そのエネルギー豊富な活動力には中村ドクターも驚嘆。

## ペシャワール行き

去る六月二十七日から八月五日までの四十日間、私はパキスタンのペシャワールに滞在してアフガニスタン(以下アフガンと略す)の難民問題と取りくんできた。それは日本国際ボランティア・センター(JVC)がアフガンの難民対策に関心をもち始めたので、それでは、ということに私自身その任務を買って出たわけである。かつて、二十

五年前になるが、私は国連ユネスコの農業教育の専門家としてアフガンに一年半住んだことがある、当時禁止された地域、例えばワツハンやヌリスタン以外はほとんど車で訪ねているので、土地勘もあり、農業や一般事情もだいたい解っている、何かの役にたつだろう、と思ったからである。JVCのスタッフである山口誠史さんと私と二人でパキスタン入りしたのが去る六月二十七日であった。

ペシャワールでの四十日間、私たちは中村哲先生一家、石松義弘医師、ボランティアの鎌田啓介さん(東北大医学部学生)等にたいへんご厄介になった。またJAMSのドクター・シャワリ以下アフガン医療チームの面々とは毎日顔を合わせ友情を深めることができた。



中田正一さんとドクター・シャワリ

ペシャワールに集まった世界各国の民間協力団体NGOは大小百二十五、ペシャワールにはNGOの協議会が作られ、それに参加しているのが六十団体を数える。日本のNGOではJAMSただ一つである。それもアフガン対策を目的として出来たのではなく、中村哲医師が現地で、個人で作ったあげたものである。

日本政府については、竹下さんの時、アフガン難民の帰還のために、トラックとトレーラーを十五億円分国連を通して出すことを閣議決定したが、当時「日本は金は出すが人は出さない」と海外から批判された

ことは、まだ遠い話ではない。

### 超大国にもてあそばされる

#### アフガニスタン

ソ連の軍隊十一万五千人がアフガンへ進攻したのが一九七九年で、今から十年前のことである。時のアフガンの革命政権を支援するというだけの名目で。これに対して回教イスラムのゲリラたちが、派閥グループや地域グループごとにソ連軍に対抗してゲリラ作戦を全国にわたって展開し、ソ連軍を悩ませつづけたことはご承知のとおりである。そのため、パキスタン側へ逃れた難民は登録された者だけで三百二十万余、西のイラン側へ逃れたのが約二百万余といわれ、合計すると五百二十万余が十年間にわたり国外に釘づけになっている。それは世界の全難民の約半数を占める。

私はパキスタン北部のアフガンの国境に近いチトラル川に沿う難民キャンプをJAMSの方々とともに訪ねたが、ほとんどが女、子供、老人である。若い男は自ら進んで、または狩り出されて反政府ゲリラとして戦っているからである。

この十年間にアフガン人の戦死または行

方不明者が二百万人をこえたという。そして今、国内に残っている者が約一千万人。

国境を越えてパキスタンとイラン側に逃れた難民はパキスタン政府や国連や世界各国の民間団体などの援助でどうにか食べて、生きているが、国内に残された一千万人の方がいま飢えに苦しんでいる。ことに今年の夏は、アフガン北部ではバッタの異常発生で農作物はひどい打撃をうけ、飢餓難民まで発生しているという。アフガン内のどの村もソ連軍の空からの爆撃でめっちゃに壊され、住む家も残されていない。農耕のための水路や飲用水のための地下水路（コリーズ）までが壊されてしまった。

いちばんひどいのは小学校であるが、十年間にわたって全く機能していない。ただでさえ文盲の多い国にさらに文盲がふえる。これは我慢ならない。何よりも許しがたいことである。

今年の二月十五日、ジュネーブ協定にもとづき、三万人の戦死者を出したソ連軍は一兵も残さず引きあげたが、ソ連軍に代わったアフガン政府軍と反政府ゲリラの戦いが今もなお延々と続いている。私たちのいた七月は毎夜のように反政府ゲリラが首都

なかつたという

\*一九〇六（明治三九）年、淡路島に生まれる。

\*一九三三年、九州帝国大学農学部卒業。

\*一九四八年、農林省、農業改良普及事業、農林技官。

\*一九六五年、海外技術協力事業団、茨城国際農業研修センター館長。

\*一九七五年、国際協力事業団のチームリーダーとしてバングラデシュに七年滞在。

\*一九八四年、風の学校創設、主宰。前身は国際協力会（一九六七発足）

#### 風の学校

この学校には校舎も教室もなければ、教科書も時間割もない。学校は生徒に住居と土地を提供するが、生徒は必要あれば月に三万円を限度として生活費を学校から借りることができる。生徒は自分の計画で、自分の労働で、自炊しながら、クワ・カマ農業をやったり、収穫物を換金し、借入れ金を返済する。この「自活実習」の中で生徒は農業と生活の原点を学び、途上国の実情に見合った適正技術を身につける。

一九六七年発足。現在まで一〇〇名余をお世話し、六〇名が青年海外協力隊員、二五名が民間のボランティアとして海外に出た。本校はなく、分校が内地に十六校、タイに二校、フィリピンに四校ある。

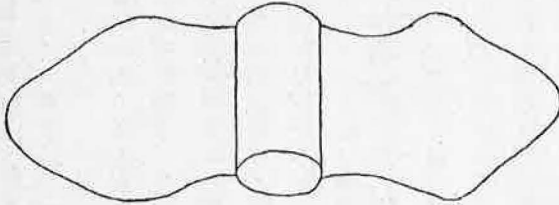
（住所）〒二九八〇二千葉県夷隅郡大多喜町下大多喜六三四一五

（電話）〇四七〇一八二二五一一五

●無差別殺傷をねらったソ連製の地雷

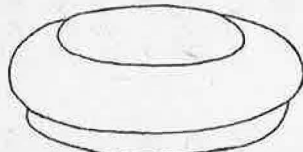
アフガンの地には今なお無数の地雷が埋まり復興を防げている

“PFM-1” 通称 蝶 Butterfly

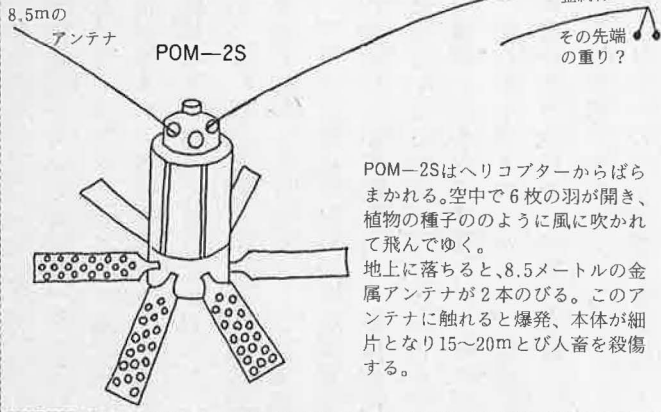


プラスチック製、羽に美しい色がついている。羽の中が爆弾子供たちがおもちゃと思って遊んでいるうちに爆発

道路など地中に埋め、土をかけてある。5~20キロの圧力で爆発する



SB-33



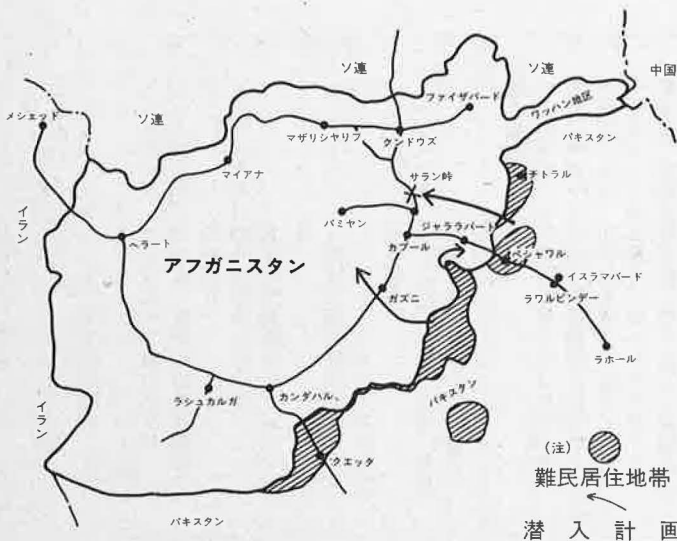
POM-2Sはヘリコプターからばらまかれる。空中で6枚の羽が開き、植物の種子のように風に吹かれて飛んでゆく。地上に落ちると、8.5メートルの金属アンテナが2本のびる。このアンテナに触れると爆発、本体が細片となり15~20mとび人畜を殺傷する。

カブールに対してミサイル攻撃をくりかえし、多数の死傷者を出していることが毎日のパキスタンの新聞に報ぜられていた。ミサイル攻撃は夜間カブールの至近距離から、あるいは四〇キロも後方から打ちこまれる。一発六百万円もするアメリカの地对地ミサイル弾だという。

政治に振りまわされ、もて遊ばれているのがアフガンの国民である。もういいかげんにしないか、と怒りがこみあげてくる。

**アフガニスタン潜入に失敗**

私たちの意図したプロジェクトの計画は差当ってはパキスタン側で始めるが、アフガン内部へも直接働きかけるものであった。



(注) ● 難民居住地帯  
← 潜入計画

そうした活動はクロス・ボーダー・オペレーションと言うが、アフガン内部の実情を知ることが何よりも大切なので、ペシャワール滞在中、難民に化けて国境を越え、アフガンへ潜入する機会をねらい、そのための準備を怠らなかつた。

ところが本年六月ごろから情勢がたいへん厳しくなり、国境に近いペシャワール附近では毎日のように爆破、殺人、放火、誘

拐などのテロが頻発していた。私たちの宿（中村先生の家）の近くでも、毎朝のようにパン、パンと銃声がきこえた、遠く、また近く。

七月四日昼の十二時、山口さんと私とがペシャワールのオールドバザールを歩いてしたが、すぐ近くでバスが爆破され、めっちゃになった。乗客の死者十人、負傷者四十人（翌日の新聞）。七月十三日私たちの宿に近いペシャワール大学の構内が爆破、七月十五日私たちの宿から百メートルの距離にあるガソリンスタンドが爆破される。七月十八日中村哲医師の勤めるミツシオンホスピタルの由緒ある教会堂が何者かに放火され焼け落ちる。という次第で、私たちの身のまわりだけでも最悪の事態であった。パキスタン警察は国境地帯に監視の眼を光らせ、外国人の国境突破は至難な状態にあった。私たちも顔のヒゲをのびし、頭にターバンを巻きアフガン難民そっくりになり、三回にわたり、それぞれ別の場所からアフガン潜入を計画したが、何れも不発に終り、残念至極、次の機会を待つことになった。

### 適正技術について 中田正一

#### 村の技術のための3つの原則

私たちの井戸掘り技術は村人たちでこなせる技術、すなわち村の技術であり、村の事情にぴたり合った適正技術でなければならぬ。それは、

- (1) 手づくりの簡易な技術であること、
- (2) 安あがりに出来ること、
- (3) すべて現地材料だけでまかなえること、である。

（「風のたより」第15号より）

適正技術っていうのは、その国々、地域地域の事情にあった技術ということ、そういう技術でないと地域に定着しませんぞっていうことです。まあ、せいぜい背のびしてとどく程度の技術ならいいでしょう。でも、ジャンプしてもとどかないような技術を持って行ったら、むこうの人は消化もできないし、定着もしない。日本の先端技術をそのまま持って行っただけでは、かえって現地の「技術かく乱」にもなりかねない。

一九八一年から八五年にかけてのアフリカのかんばつで、一万本のポンプ付きの井戸が多くの先進国の援助で掘られたの。井戸一本掘るのに、人

件費を入れると約一千万円かかる。ところが、掘ってから一年動いたのが三分の一にすぎない。ポンプが故障しても部品がない、修理ができない、だいたいガソリンが買えない……、そんなことから、いま「風の学校」では、風車や水車、手掘りの井戸掘りの技術開発をやっとるんです。

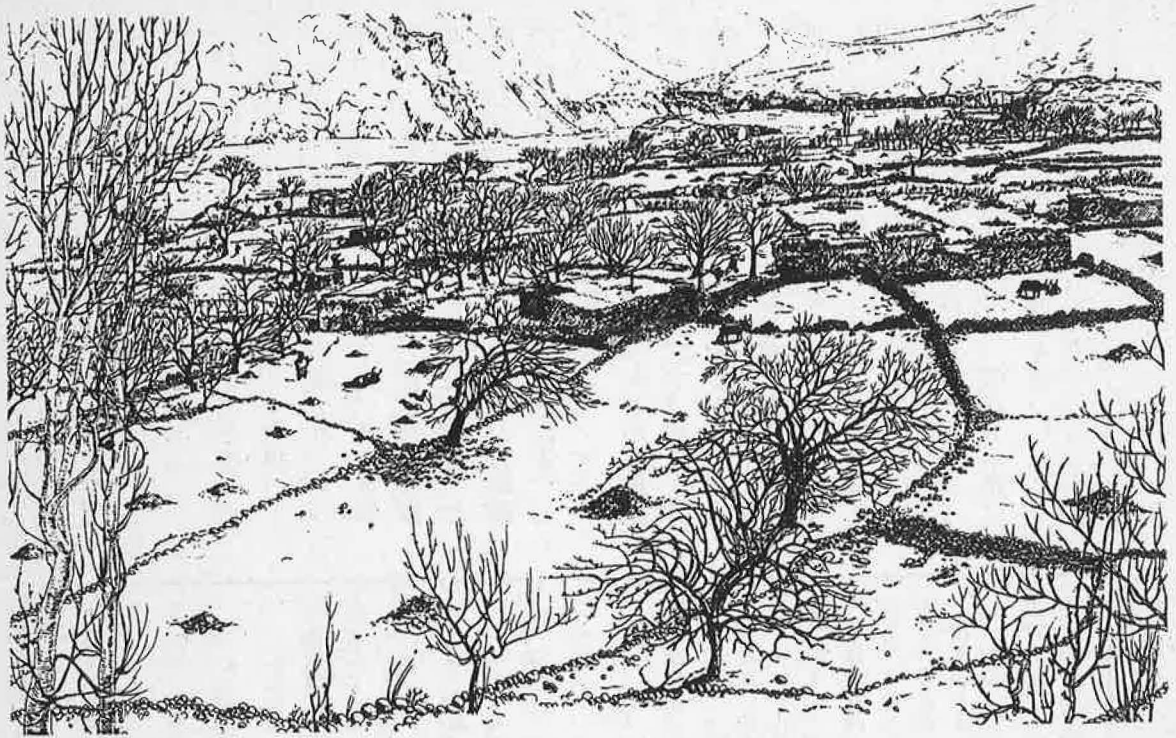
技術とか協力といったものには、ふた種類あるの。研究的な技術、協力的な技術、協力。研究的な技術というのはね、十年先、二十年先をねらいにしたもの。品種改良なんていうのがひとつの例ですな。

ところが、現地の村々で必要な技術はね、そういうもんじゃない。いますぐ役に立つ技術、村人たちが使いこなせる技術。これが普及的な技術であり、適正技術なの。いわば、村の技術、農民の技術。

日本の技術協力の中、七、八〇パーセント以上が研究的な技術の協力。普及的な協力はきわめて弱い。青年協力はべつ。これは国がやっておるんですが、青年協力量員は多くは普及的協力、草の根の協力をしとる。そして、いま本気になって適正技術、村の技術を研究してます。

しかし、いずれにしても、技術協力のやり方においては後進国だな、日本は。金だとか物だとかを援助するのはね、チャリティー（慈善事業）ですよ、協力といえない。やっぱり人間が行かなきゃ、協力という言葉は使っちゃいけない。わたしは、そう思います。

（「サイエンス」誌一九八九年八月号より抜粋）



## 花嫁

絵 山田純子 文 山田純子／俊一

● 『ヒンディ村』(石風社)より

雪がやんで、ひさしぶりに暖かい陽が顔を出す。

人も牛もヤクも外へでる。牛や羊は畑の中に積まれた肥料の人糞を競ってあさる。干草ばかりに飽いて飢えているのか、秋には見向きもしなかった人糞をねらう。人はせっかくの人糞を食われまいと刺の枝を重ねるが、それもうまくよけて食ってしまう。

「ジュンちゃん」

ちぢれ髪を後ろに束ねたジャザットが、物憂い顔で現れた。今朝はいやにそばかすが青白い顔に目立つ。

彼女は昨夜、家畜の餌を取りに屋根上に登った時、あやまって落ちたのだという。脇腹を押さえていた。服をめくり上げると、キヤーと恥ずかしがった。おなかは小さな子供のように丸くふくれ、乳房も少しふくらんでいた。私は赤くなっている脇腹を湿布した。

「今日また山羊と羊を殺したのよ」

ジャザットは安心したように話した。

「花嫁さん知ってる？ 花婿の母親の兄さんの娘よ。十五歳で可愛いから、花婿さんが見染めて申し込んだんだって」

「まず金糸銀糸の服を着るでしょ、そのうえに色とりどりのルパタ(シヨール)を四枚も五枚も被る。帽子の上に銀飾り、首にはビーズと宝石の首飾り、胸にもたくさんの宝石の入った銀飾り。手にはマニキュアをほどこし、刺繡の入った美しいハンカチを一枚持つ。そして家族と別れるとき、ワァーオって泣くのよ」

いつもは伏目がちの彼女が嬉しそうに話した。そんなジャザットに、「あなたはいつなの？」と聞くと、イヤーといって逃げていった。



J O C S ワーカーとして最も苦しい瞬間は、「草の根と共に」を常日頃口にしながら、現実には我々もまた欧米の高級クラブの一員に過ぎぬ事を実感する時である。

先日、うちの二人の子供が通っている学校の行事のことで、小さな論争が我が家でありました。上の子は9歳で小学校3年、下の子は6歳で小学校1年ですが、ウルドゥ語教育では帰国後の事が心配で、一昨年から出来たベシヤワールでは唯一の英語学校・インターナショナル・スクールに入学させました。問題になったのは「ハロウィーン」という米国の祭りです。子供達にとってはクリスマスに次いで楽しいお祭りですから、そのこと自身をとやかく言っているではありません。

我々は、週に1回難民キャンプに出掛けていますが、現在パキスタンに流れて来る飢餓難民が月に4万人、更に冬を目前に十数万人となるのは時間の問題で、新しく出来始めたキャンプの実情は語るに及びません。殆どが栄養障害の上、マラリヤの罹患率が50%以上、下痢で死ぬ子供は数知れずです。インターナショナル・スクールに通学している子供の殆どは、これら難民関

係の仕事でやって来た外国人の子弟の筈です。それに学校周辺にさえアフガン難民が絶えず行き交っているのです。問題は、学校側がベシヤワールでは贅沢な高級外人クラブ(と見なされる)アメリカン・クラブと提携して派手に市内を練り歩き、クラブの中でハロウィーンという米国の祭りを傍若無人に騒ぎ立てることです。しかも、反米感情が強く異教徒に敵しい土地柄、余りに目立ちます。要するに、デリカシーを欠くのです。

### わが家の小さな論争

中村 哲

何歳頃か忘れてましたが、敗戦直後の混乱の場面をうつつすらと子供心に覚えています。ジープに乗った米兵がチョコレートをはらまき、争ってひろつてゐる子供を眺めて楽しんでいた光景を私は忘れることができません。親の命令でチョコレートを拾って食えなかつた胃の恨みのせい、何故かこの場面は強く印象に残っていて、この時の連中に対する怒りと屈辱感を今も覚えます。私はついカツとなって、「アメ公の

まねをして地元の人を馬鹿にするな」と強く言いました。

しかし、子供達にしてみれば何の事やら合点のゆくはずありません。結局私は自分の感情の押し付けの非を悟り、楽しいことは楽しいこと、と割り切ってハロウィーンの集まりに出席させました。

ところが、このような外国人の態度は、直ちに一つの事件として彼らを震え上がらせた。この直後11月初めに、ある英国の難民救済団体の管理者

が行方不明となりました。恐らく誘拐されて消されたのです。この団体は良心的なキリスト教団体でしたが、「殉教も辞さぬ」一部の英雄気取りのメンバーが聖書を配るなどの「伝道活動」をキャンプで行って、ひんしゆくを買っていたのでした。確かに近代化された人々の目から見れば、現地は荒唐無稽なイスラムの風習に支配されているでしょう。その無知と後進性を嘲笑うこともできるでし

よう。また、慣れぬ土地に居る外人にしてみれば、たまの息抜きも必要でしょう。だが、そこに自ずと節度と現地への配慮がなければなりません。現地では今、「援助」の名で闊歩している外人への反感が高まりつつあります。私は当然だと思えます。現地の人々を将棋の駒のように使い、自分の野心や業績、自己の情熱の満足の実現に忙しい彼らが、どうして信頼を受けることが出来るでしょう。決して外人への復讐を歓迎するものではありませんが、もし自分が地元の人間だったら同様の事をしてもし思議はなからうと思いません。

ともあれ、私としてはこのような地元の反感に同情しつつも、危険もさることながら、自分もまた、その一人たらしめるを得ないという現実をいたたまれぬ感じが致します。地元に見ても、外人の横着さは我慢ならぬが、さりとて援助なくして食ってゆけないという現実があります。それでもー？という答えのない自問は大きくなるばかりの今日この頃です。

\*

(J O C S 「折りの手紙」 82号より)

\*

## ペシャワールでは マイ・ペースで 仕事をします

沢田裕子

去る十一月下旬、事務局の沢田裕子さんがペシャワールに向けて出発しました。同行は作業療法士の蔵所麻里子さん。二人は心電図用紙にペルシャ語のタイプライター二台、それに医薬品をいろいろと、女の細腕(?)では気も遠くなるような重い荷物をかついで成田をあとにしました。

出発前の慌ただしい中、事務所で薬品梱包の作業をしながらの沢田さんに話を聞きました。

### ●おサケとアジアへの関心

——ほとんどの事務局スタッフが「たま

たま」のペシャワール会や中村先生との出会いから、活動に深入りしていますが、沢田さんの場合はどうですか。

私も同じようなものですね。

六年ほど前、友人から、「中村という福岡出身のお医者さんが、パキスタンのペシャワールとかいう処に行かっしやあげな。その壮行会が今日あるもんね。行ったらサケが飲めるげな」という話を聞いて、飲み会というのとパキスタン⇨アジアへの好奇心から顔を出したのが、中村先生、ペシャワール会との出会いです。その後二年ほどアメリカに行っていたので、中村先生とはす



事務局メンバーによる壮行会（中央が沢田さん）

れ違いが多かったのですが、その数少ない出会いの中でも、中村先生という人は、現代の日本人にはない不思議な魅力を持った方だなあと感じていました。私自身、ペシャワール会に入る前からアジアのことに関心を持っていましたし、アメリカに二年間滞在するうちに、ますますその気持ちは深まっていました。そんな時、中村先生も私のことを覚えて下さっていて、ペシャワールでのお手伝いの話が出て来たのです。私の中にも会報や本を読むうちに丁度自分の目で確かめたいという気持ちがありましたので、いい機会だと思っただけです。

### ●初めての事務系スタッフ

——これまでも仲間が何人も手伝いに行っていますが、すべて医療関係者でした。今回、初めて事務系のスタッフの協力ということになりましたが、どんなことをするのですか。

実は私にもよくわからないんです。中村先生からはJAMS（ジャパン・アフガン・メデイカル・サービス）の事務が混乱しているから手伝いに来てくれとしか聞いていないんです。ただ、これまでJAMSの事

務を、ペシャワールでの対外折衝や日本の関係機関との連絡を含め、全て中村先生がやっておられたので、結構お手伝いするとはあるんじゃないでしょうか。

——沢田さんはアメリカでの異文化体験があるわけですが、ペシャワールは、日本やアメリカとは全く異質な世界ですね。

そうですね。イスラム世界については、本など読んで、ある程度の知識は持っていますが、とにかくあるがままに先入観なしに受けとめられればと思っています。幸い去年から今年にかけて行った看護婦の安部さんから、女性ならではの細かいアドバイスももらいましたので、心配はしていません。多分、私の性格から、現地にそれなりに溶け込めるのじゃないかな。

今は、文通で芽生えた、まだ見ぬ恋人（ペシャワール）に初めて会いに行くような気持ちです。ドキドキしています。

とにかくあまり欲張らずに、できるだけマイペースで仕事をするつもりです。

●ボーダーレスにエネルギーギッシュに

沢田さんは、昨年の秋アメリカから帰国

しましたが、これもみんなのサワダ・コールで帰って来たようなもので、その後会報の編集をはじめ精力的に会の仕事をやってくれました。また出発前の三カ月間は、ペシャワールでの滞在費捻出のためニューヨークに出稼ぎに行くというボーダーレスの活動ぶりでした。日本側事務局としてもエネルギーギッシュな彼女の不在は痛いのですが、男が何人か束になればその穴も埋まるでし

●『ペシャワールにて』の反響から

『ペシャワールにて』は、さまざまな反響を呼びつつ初刷が売り切れたので、増刷をいたしました。新聞・雑誌等による紹介や読者カードもたくさんいただきましたが、ここでその中から二つをご紹介します。

\*人間に対する愛情と希望

本書は、ペシャワールにおけるらい治療の目的と諸実践によって書かれているので、声高な政治批判を展開しているわけではありませんが、その一貫した意志が読む者の心を一層引きつけるのだと思います。

ドクターの治療を通じたバシュトゥウンの人々の点描は、その素晴らしい力の源泉を描き出し

よう。彼女がJAMSにとつて何等かの助っ人になることを期待するとともに、よりパワフルになって帰還することを希っています。

無理せず、体につけて、ペシャワール・ペースでやって下さい。

噂では、片道切符だったという話ですが、来年の春には元気に帰って来て下さい。

(文)

ていたと思いました。ドクターの人間に対する愛情・希望がずい所に感じられました。

「人の世に熱あれ、人間に光あれ」

(福岡市 男性33歳)

\*日本人の不様な生きざま

数百万人のアフガン難民が流れこむパキスタン北西辺境州の州都ペシャワールでハンセン病を中心に難民の治療にあたる日本人医師中村さんの痛烈な日本や日本人へのメッセージ。

ペシャワールでの見聞・体験もさることながら、アジアの辺境からみた日本人はなんと不様な生きざまをみせていることか、アジアと共に生きる道を本格的に模索すべきという著者のことばは力強い。快著。

(評論家 田原総一郎「ベストブック」No.7)

●事務局だより

\*石松先生の原稿が十四日に届き、今号に載せるかどうか迷ったあげく(メ切りの関係で)載せました。何せ中村先生がインタビュするという前代未聞のことで、立ち合った沢田さんの手紙では、「紙面では、あの二人の珍妙な雰囲気伝わらないのが残念」ということでした。会報編集部としては、全く考えもしない「企画」でしたので、今後このシリーズはインタビュアーを入れ換えたりして続けたいものです。(ただ残念なことにまだ写真が届かない)

\*沢田さんも蔵所さんも元気に頑張っていて、長期滞在の沢田さんは、昼はJAMS、夜はペルシャ語の学校と結構忙しい毎日のようです。

\*十二月初め、事務局メンバーと中国からの女子留学生の総勢七名で、宮崎県の大崩(おおくえ)山麓にある小さな部落(十一戸)に、夜神楽を観に行きました。夜神楽は、農家の庭先に八畳ほどの舞台をしつらえ、お昼過ぎから翌日の昼前まで、村人によって延々と演じられます。深い闇につつまれた山奥の農村のその一軒にだけあかあかと光が灯り、太鼓の単調なリズムが私たちが日頃は使うことのない脳細胞を刺激しつつ、うねるように響きます。そして外は満天の星。この部落は高千穂を延岡の方にしばらく下り、それから山に向って溪流沿いに車で十分ほど逆上った処にあるのですが、人家の灯の全く見えなくなった小さな峠で私たちは車を止め、星を見ました。深々とした闇の中で見上げる星は、本当に美しかった。流れ星を見ながら、星は昔より少なくなっただけではなく、ただ見えなくなったのだ(都市の人間にとって)というあたり前のことを思ったものです。私たちが部落に着いたのは真夜中。寒気

の中、火鉢を囲んで焼酎を飲み、村人と語りつつ神楽を観ると、夜も白々と明け、アメノウズメが舞っていました。村の人に別れをつけ、霜柱の心地よい響きを感じつつ、こももとして日本もアジアなのだと強く思いました。

\*年が暮れようとしています。会員の皆さんをはじめ各種団体のご援助により、今年も中村先生とJAMSの活動が支えられてきました。今年は特に、石松先生はじめ幾人ものボランティアを送り出すことも出来ました。また自前の事務所を持つことも出来ました。これも偏に、皆さま方の熱い心によるものと感謝しております。九〇年代は世界規模での激動と再編成の時代かと思えます。私たちも、中村先生の活動を一つの指針として、考えそして行動して行きたいと思えます。

いいお年を!

\*一月には石松先生が一時帰国の予定です。報告会を予定しております。日程は追ってお知らせします。(お願い)当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMCA内ペシャワール会宛でお願いします。(〒810 福岡市中央区天神一丁目10-24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡9-6559 ㊟六二七四〇〇)

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ  
中村 哲著 四六版上製二〇頁 一、五四五円

ペシャワールにて  
— 癩(い)そしてアフガン難民

石風社 せきふうしゃ  
福岡市中央区大名一丁目二十五  
電話〇九二七二四四八三八

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、JOCSSの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、派遣母体であるJOCSSを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑤ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE  
(千八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇、二五 上村第二ビル三〇七号 ㊟七三二二 二三七二) 内におく。